中国赤軍物語

中国赤軍物語

北　京
外文出版社

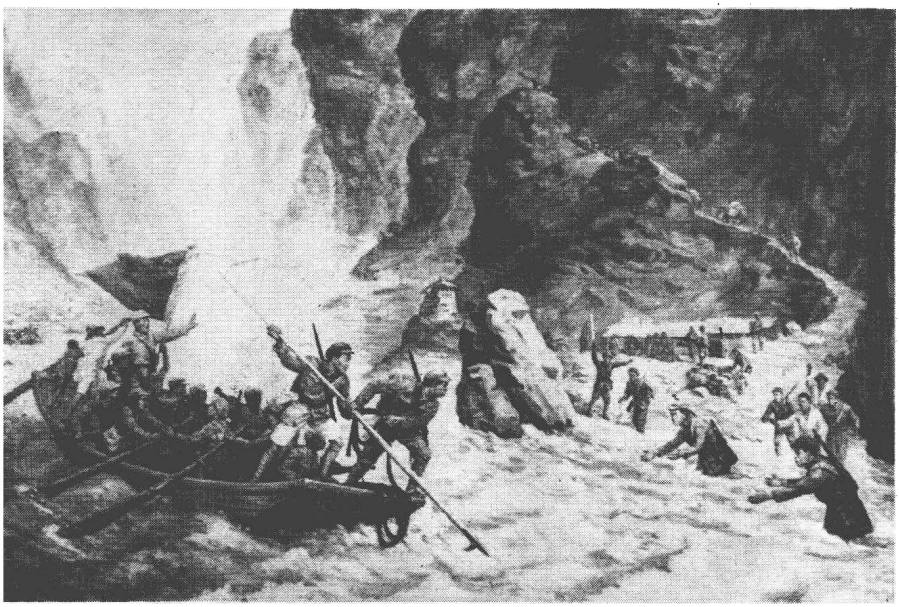
中国赤軍物語

1958年8月　初版発行　　定價 300円

出版者　外文出版社
中華人民共和国
北京阜成門外百万莊

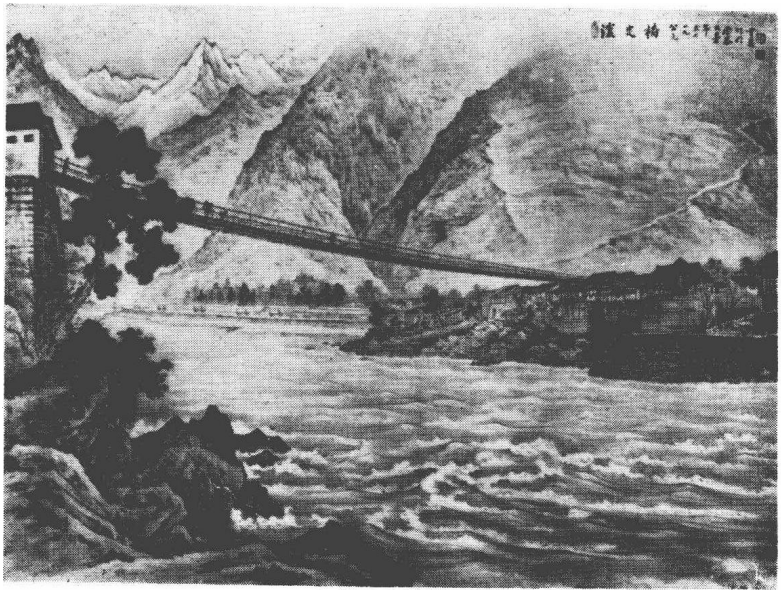
編号：（日）3050—92

毛沢東、朱德両部隊井岡山で合流　　王式廓　画



金沙江の強行渡河　　張漾兮　莊子曼　画

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co



泸定桥　　岑学恭　画

大草原をゆく赤軍　　劉　崙　画

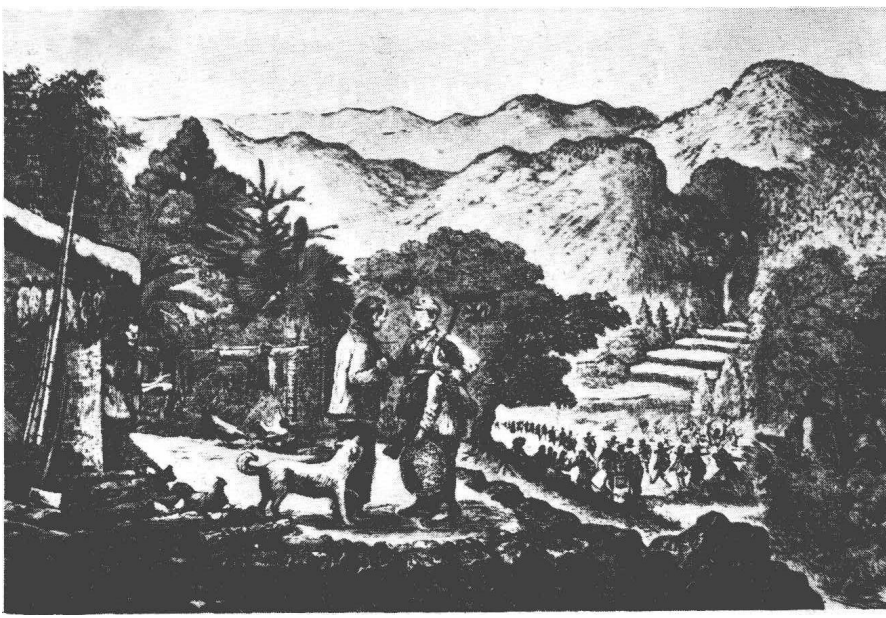
赤軍が帰つてきた　　江志杰　画

陝西省北部にたどりついた赤軍

大渡河の強行渡河　　宗其香　画

大雪山をこえる赤軍　　苅田信　画

平江蜂起　　彭友善　画



赤軍にはいる　　沃　渣　作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

まえがき

中国人民は長期にわたつて帝国主義、封建制度および官僚資本主義の圧迫をうけ、その支配のもとできびしい苦難の日々をおくつた。同時に、中国人民は解放をたたかいとるため、きわめて困難な條件のもとで長期にわたるはげしい闘いをすすめ、数かぎりない英雄的な事績をのこした。日本の多くの友人たちはさだめしこうした事績に関心をいだいておられるにちがいない。中国人民がどのような苦しみをなめ、どのような艱難、曲折の道をあゆみ、どのようにして一歩々々こんにちの偉大な勝利をかちとつてきたか——日本の読者はそれをこうした物語をつうじて理解しようとしておられるにちがいないと思う。ここに、その闘いを身をもつて体験してきた人たちの手記をあつめて「中国赤軍物語」を編み、日本の読者のかたがたへおくることとした。

本書におさめたのは一九二七年から一九三七年にいたる第二次国内革命戦争の時期の中国労農赤軍の物語である。つぎに参考のため、この時期における中国労農赤軍の創設と闘争の経過をごく簡單に紹介しておくこととする。

× × ×

一九二七年というと、国民党と共産党の合作によつてうちたてられた廣州(クワンチョウ)革命政府が北伐戦争をおこしてから、ちようど二年目にあたる。そのころ、北伐軍はいたるところで北洋軍閥の軍隊をやぶり、またたくまに揚子江(ヤンツーチヤン)流域を制圧して、黄河(ホワンホー)の流域へとその勢力をひろげていつた。各地の廣はん

な労働者、農民も、中国共産党の指導のもとに軍閥、官僚、土豪劣紳にたいする闘争をすすめ、積極的に北伐戦争を支援していた。だが、勝利を目睫の間にひかえたこの重大な時期に、国民党当局はとつじょ革命をうらぎった。蔣介石（チャンチエシー）にひきいられる国民党反動派は上海にはいるや、帝国主義、封建勢力、買弁資本家階級と結託し、四月十二日には革命的な労働者大衆の大虐殺にのり出したのだ。国民党反動派はつづいて「清党」政策（注）を実行にうつし、各地で共産党員や革命的な大衆を逮捕、殺害し、労働組合の活動を禁じ、ピケ隊の武装を解除し、農民運動に弾圧をくわえ、蔣介石をかしらとする反革命政府をつくりあげた。こうして、帝国主義、封建勢力、買弁資本家階級は蔣介石という新しい代理人をつかつて、ひきつづき中国を支配した。ところが、そのころ中国共産党の指導者であつた陳独秀（チェントーシュウ）は右翼日和見主義の誤つた方針をとり、蔣介石の裏切り行爲にたいし譲歩と妥協につとめた。陳独秀は大衆を反動派との闘いに起ちあがらせないばかりか、かえつて労農運動を「行きすぎだ」と非難し、ひたすら反動派に追随して大衆運動を抑制した。その結果、折角すばらしいいきおいで発展していた革命も、反動派の不意打ちの弾圧をうけ、挫折してしまつた。

中国革命はこのときからひじょうに困難な時期にはいつた。中国赤色救援会の統計によれば、蔣介石の反革命政府が一九二八年から翌一九二九年までに殺害した共産党員と労働者農民大衆は四十五万人にのぼり、一九三〇年の八月から十月までの三カ月間に殺害した共産党員は十四万人にのぼつた。全国の人民は白色テロの脅威にさらされ、進歩的な労働組合はすべて活動を禁じられ、労働者とその指導者たちは迫害をうけた。労働者のうちすこしでも闘争の経験をもつものは八割までが殺害されたり工場を追われたりした。革命の高揚期に労働者がたたかいとつた経済上の利益や民主的な権利はすべて剝奪された。反動派は労働者の賃金をひき下げ、労働時間をふたたび十一時間以上に延長し、さらに休日をなくしたばかりか、工場には私服、巡査、軍隊をさしむけて労働者を監視した。また農村

では、反革命的な蔣介石政権の支配に力をえた地主やボスが農民にたいして反撃をくわだて、収奪されたものをとりもどすとともに、いったん実施された小作料や利息の減免を廃止して逆にこれを大幅にひきあげた。反動政府はまた、租税をひきあげたので、農民は貧窮のどん底にあえぎ、農村経済は荒廃した。こうした時期にあつて民族資本家階級だけでなく、小所有者階級の上層の人びとも革命からはなれていつた。共産党に入党していても立場のしつかりしていない小所有者階級出身の知識人の多くも脱党した。だが、英雄的な中国共産党と革命的な人民は、決して屈伏しなかつた。毛沢東同志が「連合政府について」のなかでのべているように、これらの人びとは、「けつして、きもをつぶしたり、征服されたり、殺されてしまつたりはしなかつた。彼らは地下からはい上がり、からだについた血のりをふき、同僚の屍をあつくほうむり、たたかいをつづけていつた。」

挫折した革命をもりかえすため、周恩來、朱德、賀龍、葉挺などの同志たちは三万の人びとをひきいて、一九二七年八月一日、江西省の南昌で武装蜂起をおこした。けれども、蜂起した部隊は江西省の農民運動とむすびつけず、廣東省にむかつて南下したため、ひじように大きな損害をこうむつてわずかな勢力をのこすだけとなつた。

一九二七年八月七日にひらかれた共産党中央委員会の緊急会議では、革命の態勢をもりかえすため、農民にむかつて秋の收穫どきを機会に蜂起することをよびかけた。この会議ののち、毛沢東同志は江西省の西部と湖南省の東部地方におもむき、農民や労働者や北伐軍の一部を指導して蜂起し、労農革命軍をつくつた。つづいて、ひじような困難とたたかいながら、この部隊をひきいて湖南省と江西省の省境にある井岡山地区へ行き、ここに最初の革命根拠地をうちたてた。このほか、共産党は湖北省の東部、湖南省の東部と南部、廣州市、廣東省の東部、海南島やその他の地方でも蜂起をおこした。このうち、湖南省南部の蜂起は朱德、林彪、陳毅などの同志が指導したものである。これらの同志た

ちは、南昌で蜂起した部隊のうち廣東省で挫折したあとにのこつた一部分の兵力をひきいて湖南省の南部にはいり、この地方の農民蜂起を指導して、部隊を九千人あまりに発展させた。一九二八年四月、朱德同志はこの部隊をひきいて井岡山に移り、毛沢東同志のひきいる部隊と合流した。あわせて二万人あまりからなるこの二つの部隊で中国労農赤軍第四軍が編成された。この第四軍は井岡山付近の各縣で遊撃戦争をすすめ、農民を指導して土地を分配し、労農政府をつくるとともに、湖南省と江西省の軍閥の部隊の三回にわたる包囲攻撃をうちやぶつた。この時期には、江西省、福建省、湖南省、湖北省、廣西省などの地方で党の指導した農民の遊撃戦争や土地革命も発展し、つぎつぎに赤軍のいくつかの部隊や革命根拠地がつくられた。一九二九年に毛沢東同志と朱德同志にひきいられた赤軍は、江西省南部と福建省西部にむかつて進撃し、江西省の瑞金を中心にして、中央革命根拠地をつくりあげた。

毛沢東同志が井岡山に兵力をうつして根拠地をきずいたことは、ひじように大きな歴史的意義をもつものであつた。毛沢東同志は一九二八年十月に発表した「中国の赤色政権はなぜ存在することができるか」という論文で、帝国主義が間接に支配している半植民地中国では各派の軍閥のたえまない分裂と戦争によつて一種の空白地帯がうまれるので、農村の赤色政権がその周囲を白色政権にかこまれながら発生し、存在することができると指摘している。毛沢東同志は、赤軍の戦争、土地革命、農村の革命根拠地というこの三者をむすびつけ、長期にわたる革命戦争をつづけてゆくならば、農村の革命根拠地を一歩々々と拡大発展させて都市を包囲し、ついには全国的な勝利をおさめることができる、と指摘している。このとき以來、共産党の指導によつて革命根拠地をつくり、革命戦争をすすめることが新しい時期における中国革命の主な内容となつた。

このころ、毛沢東同志は第二次国内革命戦争の時期における共産党の基本方針をきめたばかりでな

く、各方面の具体的な政策についても重要な方針をうちだしている。すなわち、土地革命の方針については、「貧農と雇農にたより、中農と連合し、富農を制限し、中小工商業者を保護し、地主階級を一掃する」という政策をきめ、それを断固として実行した。軍事方針については、赤軍が党や人民政権、土地改革やそのほかすべての地方工作についての宣傳者、組織者でなければならないこと、赤軍が部隊のなかで強力な政治工作をおこない、厳格な大衆規律をうちたてねばならないこと、赤軍が人民の力に依拠した戦争をおこない、遊撃戦と遊撃性をおびた運動戦をこの時期の主要な戦争形態としなければならないこと、赤軍が戦略的持久戦と戦役的速決戦を堅持しなければならないこと、平時には兵力を分散させて大衆をたちあがらせ、戦時には優勢な兵力を集中して敵を包囲せん滅しなければならないこと、などをきめた。

一九三〇年になると、全国の赤軍は約六万人に発展した。一九三〇年とそれからすこしのちの時期には、革命根拠地の範囲も福建省、安徽(アンホイ)省、江西省、陝西(シャンシー)省、甘粛(カンスウ)省、廣東省の海南島にまでひろがつた。この赤軍の急速な発展にふるえあがつた蔣介石は、一九三〇年のすえ、江西省の中央革命根拠地へ軍隊をさしむけて大がかりな包囲攻撃をはじめた。だが、労農赤軍は毛沢東同志の正しい戦略にみちびかれて、一九三一年の一月から九月までのあいだ三回にわたる敵の包囲攻撃をつづけさまにうちやぶつた。赤軍の力はますます大きくなり、革命根拠地もひろげられた。

ちようどこのとき、日本帝国主義の中国侵略がはげしくなつてきた。一九三一年九月十八日には、日本帝国主義は瀋陽(シェンヤン)に進撃してきた。だが、蔣介石一味は外には無抵抗政策をとるとともに、内には「共産党討伐」をきびしくして、ファッショ的テロ政策を強化した。そのため、日本帝国主義はいちはやく全東北を占領したばかりか、一九三二年には上海に進撃し、一九三三年には熱河(ローホー)省とチャハル省の北部を占領し、一九三五年には河北(ホーペイ)省の東部を占領した。

こうして、日本帝国主義の侵略にたいする抵抗が全中国人民の緊急な任務、普遍的な要求となつた。労働者、農民、学生の抗日運動が全国の各地でもりあがつてきた。中国共産党はまつさきに武力抵抗を主張し、全中国人民の抗日運動や東北人民の抗日遊撃戦争を指導し、これに参加した。中国労農赤軍は、一九三三年一月、国内の軍隊で赤軍にたいする攻撃をやめ、大衆を武装し、人民に民主と自由をあたえることをのぞむ軍隊ならどの軍隊とも協力し、ともに力をあわせて日本と戦うという宣言を発表した。だが、蔣介石は、一九三三年二月、赤軍にたいする第四回目の全面的包囲攻撃をおこすことをもつて、赤軍のこの正義の主張に回答をあたえた。赤軍はこの包囲攻撃反撃戦でも、毛沢東同志の戦略にもとづいて、ひじように大きな勝利をえた。ところが、一九三三年十月、蔣介石はまたもや百万の兵力をくりだして赤軍に第五回目の包囲攻撃をくわえてきた。この戦役では、そのころ中国共産党の中央指導部にあつた陳紹禹(チンシャオユイ)同志や秦邦憲(チンパンシェン)同志を中心とする「左」翼日和見主義の一派が毛沢東同志のきめた正しい軍事方針にそむき、まつたく間違つた防禦一点ばりの軍事方針やその他の間違つた政策をとつたため、赤軍は敵の包囲攻撃をうちやぶることができなかつた。一九三四年十月、中央赤軍は包囲をやぶつて江西省の根拠地をしりぞき、世界的に有名な長征の途にのぼつた。全中国のその他の赤軍も、陝西省北部の赤軍のほかはいずれも、古くからの根拠地をしりぞき、長征をおこなつた。赤軍の主力が移動したさい原地にふみとどまつた一部の遊撃隊は、八つの省であくまで遊撃戦をつづけた。

一九三五年一月、長征の途上にあつた中国共産党は貴州(クイチョウ)省の遵義(ツンイー)で中央政治局拡大会議をひらいて、「左」翼日和見主義一派の指導に終止符をうち、全党における毛沢東同志の指導的地位を確立した。

遵義会議ののち、中央赤軍は西に向つて雲南(ユンナン)省をすぎ、四川(スーチョワン)省と西康(シーカン)省の省境を迂回して六月には

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com